

辰野隆

漱石，乃木將軍，

赤彦，茂吉

漱石・乃木將軍・赤彦・茂吉

今年の正月であつたか、或る寒い晩、安倍能成、小宮豊隆両氏と一緒に酒を飲みながら閑談したことがあつた。吉村冬彦氏が亡くなられて間もない頃であつたから、話題は冬彦氏のありし日の追憶から漱石にまで遡さかのぼつた。数年来小宮氏と会つて漱石と冬彦の話の出ないことはなく、この二人の大家を語るのが僕には頗すこぶる楽しいのだが、その夜は更に安倍氏も加わつたので一層話にも油が乗り酒も旨かつた。談たまたま漱石の『こゝろ』に及んだ時、安倍氏がこの傑作を褒めながら「然しこの小

説は何となくブキツシユなところがあるなあ」といった。

安倍氏のこの言葉は既に「思想」の漱石記念号に掲載された、氏の『「こゝろ」を讀みて』という文中で讀んだ記憶があり、かたがた旁々その言葉を僕は是認してもいたから、素直に聴いていた。唯僕は、ブキツシユに相当するフランス語のリヴレスクや支那の画論などに往々出て来る「書卷の氣」という成語を漫然と思ひ浮べていた。

小説『こゝろ』に対する安倍氏のブキツシユという形容詞はリヴレスクと同じく、多少批難の意味を籠めた語

で、実相に徹せずいまだ書齋臭の漂うのを咎める心持なのである。然るに「書卷の気」というと、之は必ずしも批難の意味ばかりではなく、時に褒める形容にも使われるらしい。いまだ書卷の気を脱せずと云えば貶けなすことになるが、書卷の気掬きっすべしと云えば匠気に染まぬ品格を褒めることになるのだろう。由来、書卷の気は敢えて漱石の『こゝろ』にとどまらず、漱石の他の凡ての作にまで浸み込んでいる。単に漱石のみならず鷗外の凡ての制作にも亦冠し得る形容詞であろう。

僕等が青年時代から、小説を読むことが即ち知識の涵かん

養ように他ならぬことを知ったのは、主として鷗外、漱石両大家の嚴然たる態度に因よるものと今もなお確信している。

最近に安倍氏の随筆『草野集』の中の『「こゝろ」を讀みて』を改めて讀み直して、更に新たな感興を覚えたのみならず、昨年の夏休みに久しぶりで『こゝろ』を讀み、この傑作の底を流れる “The still, sad music of humanity” に沁々と触れ得たことをも併せて思い出したのである。僕はかねがね漱石の小説では『それから』と『行人』と『こゝろ』とを三大傑作と信じ、殊に『こゝろ』には特別の関心を持つのみならず、近代日本の小説

中この作を最も道義的意義の高い傑作の一つだと思つていたので、安倍氏の批評を一層興深く読んだのであつた。氏の文中には、次のような言がある。

「私は『先生』——『こゝろ』の主人公——の恋のライヴアルのKが非常によく書いて居ると思ふ。一面には周圍に鈍感であつて、強い意志で自分の志す所に精進する道徳的エゴイズム、然もそのエゴイズムの作為なく虚偽なき純真、同時に一切の責を自分に負つて人を累わづらわさない孤獨的な強さ、それも努めてやつたの

ではない自然的な強さは『先生』の遺書の中に、実に簡勁に具体的に描出されてゐる。例へば『先生』から恋愛のことを問ひ詰められて『覚悟——覚悟ならないこともない』と独言のやうに又夢の中の言葉のやうに言つたといふ一節、自殺した時の遺書の中に多くをいはず、『もつと早く死ぬべきであつた』と洩らした詞の如き、実にリアルに読者に迫るものがある……」

嘗て、『こゝろ』を読んだ当時、僕はKの自殺の件りに至つて、深く憾うごかされたことを今もなお忘れ得ない。

自殺が不道徳であるとか、神の教えに背くとかいう考え方の入り込む余地のない程Kの死は緊張したものだと思つたのであつた。

小説『こゝろ』は安倍氏の指摘する如く、明治精神の讚美でも挽歌でもあつた。氏はその点について、「又『先生』はその遺言の中に明治天皇の崩御に説き及ぼし『私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢後れだといふ感じが胸を打ちました』と云ひ『自分が殉死するならば明治の精神に

殉死する積りだ』といひ、同時に乃木大将が明治十年以来死なうと思ひつつ生きながらへた三十五年の苦衷に深い同情を払つて居る」と書いている。

『こゝろ』において、漱石がたまたま触れた明治精神や乃木將軍の殉死の問題から、僕は凶らずも晩年の乃木將軍の面影を記憶の底から呼び覚ましたのである。殉死前の数年間、將軍は既に功成り名遂げた英雄として、静かに学習院長として余生を送つて居られた。当時僕は帝大法科の学生だったが、赤坂見附に桜の花の散る頃など、白馬に跨またがつた將軍が学習院女子部に通う生徒等の敬礼

に馬上から挙手の礼を以て応ずるのを屢々目撃して、古
武士と妙齡の姫達とを交々眺めつつ、一幅の絵を脳裡に
描くのを禁じ得なかつた。

それは金州城外斜陽を浴びて佇立した將軍とは著しい
コントラストをなす和やかな光景ではあつたが、観る者
の心には、もし將軍の戦歿した二人の愛児が生きていら
れたら、という感慨が自ら湧いて来て、寂寞たる人生の
姿を馬上の將軍に想い見るのであつた。僕は乃木將軍と
同じ町内の住民であつた。將軍は毎朝、白馬に跨つて家
を出ると、青山御所に向う広い通りを山本条太郎氏邸の

角から右に折れ、裏通りを抜けて憲兵屯所から表町通りに出て、女子学習院に赴くのが例であつた。僕の家が丁度その裏通りに面していたので、夏休み前の試験を控えて、二階からぼんやり外を眺めていると、垣根の上を馬上の將軍の首だけが揺れてゆくのを折々見かけた。いつ見ても將軍の風采は清楚で、軍人にして政治家を兼ねる輩のあくどさなどは微塵も無かつた。僕の弟も屢々將軍の馬上の姿を觀ていたので、夕食の折には「今日も乃木さんを見かけたが、実に清々しくハイカラな武人だなあ！」と互に語り合つたものである。

秋の夜など、学習院男子部の生徒が將軍の邸を訪ねる時には、將軍はいたく悦んで迎え、生徒が暇いとまを告げると、玄関まで送り出て「わしも秋は淋しいから再た遊びに来て呉れ」と沁々別れを惜しまれたそうである。

乃木將軍のことを考えると、僕はいつもコルネイユの悲劇を想い出さずにはいられない。『ル・シツド』の父親ドン・ディエグや『オラアス』の老オラアスの姿がまざまざと浮んで来る。是等一徹な古武士の役は名優ポオル・ムウネの独壇場であった。僕が巴里の国立第一劇

場で観た彼のドン・ディエエグは、恐らく彼の最後の舞台であつたろう。

その夜、彼は何十年来演じて来た而も得意の役を勤めながら幾度か絶句して、スツフルウルの助けを借りなければならなかつた。その度毎に観客席のおちこちから「オー！」とか「ス・ネ・パ・ペルミ」という非難の声が漏れた。

それから数日の後、僕は凶らずも新聞で彼の死を読んだ。先夜の絶句は畢竟するに死の予告であつたのかと思つた。而して名優ポオル・ムウネも亦その道に倒れた人

としての敬意を払われるに値すると思つた。彼は悲劇俳優として兄のムウネ・シユリイに及ばなかつたが、利欲に恬淡てんたんな節義ある人格者として、常に同輩から畏敬されていたそうである。

僕の秋の感想は安倍氏の随筆から、漱石の『こゝろ』に、明治精神に、乃木將軍に、而して更にコルネイユの悲劇から名優ポオル・ムウネに、そこはかたなく移つていった。由来、一個の信念に殉じた人々の生涯には、芭蕉の所謂「この一筋につながる」寂然として嚴肅なありがたさが感じられる。最近にアララギの赤彦記念号を讀

み、ここにも、赤彦その人の「この一筋につながる」ありがたさを味い得たのである。この記念号に於いて僕は岡麓、斎藤茂吉、土屋文明、結城哀草果の如き諸名家の評論、感想、思出や久保田健次氏の『父と私』など、とりどり敬読した。殊に斎藤茂吉の『童馬山房夜話』（二十）「赤彦の歌十首」を再読熟読して多大の教えを受けたのである。僕は日頃、歌人としての茂吉氏を畏敬しているのだが、それ以上に歌学者としての、特に和歌の批評家鑑賞家としての茂吉氏をその道の第一人者と信じて疑わないのである。

茂吉氏の選んだ赤彦の歌十首の中に、

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつ
らう

というのがあつて、全く、歌もここまできると、殆ど天衣無縫の概おもむきがあつて、人麿や赤人の秀歌に比して、勝るとも劣らない。これは正に秀歌であると同時に名曲であると思う。この三十一文字の裡にこもるアルモニイとい

うか、サンフオニイというか、まこと洵に無類の調べである。
茂吉氏はこの歌を評して、

「この一首は何処に妙味があるか、取りたてて秀句とか秀語といふものがなく特に感覺の精微とか想の奇抜とかいふものもなく、誠に淡々として一首が終つてゐる。それにも拘らず一首は何となくいい、何となく深味があり、何となく莊嚴で、何となく平遠で、何となく悠久である。これは一体何処から来て居るかといふに、もう少年時代から青年時代、老年と実に長いあひ

だ惨みこんでゐる諏訪湖の歌だからだらう。さう思ふと忽然として悟入するやうなところもあれば、歌を作ることの恐ろしくなるところもある。」

と言っている。

蓋し赤彦と諏訪湖との因果はセガンチイニとアルプスの因果の如くに結びついている。嘗てジュネーヴの美術館でセガンチイニのアルプスの草原の絵を観て、この絵ほどこの画家の寂しさを表現し得た傑作も少かろうと思つたが、その絵にはどこかに肺を病む人の弱々しさ、死

の近さを想わせるものがあつた。然るに赤彦のこの歌にはそういう病的な寂光は射していない。寧ろユウゴオの『オランピヨの悲哀』の中の「秋は微笑していた……」の一節、

L'automne souriait, les coteaux vers la plaine.

Penchaient leurs bois charmants qui jaunissaient à
peine.

Le ciel était doré, ……

の如き大家中の大家の巨腕が窺われるのである。固より、そこに赤彦が晩年に唱道した「寂寥相」がおのずから沁み出て、この秀歌の輪郭をいみじく彩っているが、セガンチイニ的ではない。

谷かげに苔むせりける
仆れ木を息づき踰ゆる我
老いにけり

茂吉氏曰く「この歌から半年も経たずに胃癌の病状があらはれたのだから、もうこの時には身体の違和を感じ

てみたかも知れないのである。調べは実にゆつくりと落着いてものしづかに歌はれてある。そして『我老いにけり』と余響の長い語で止めてゐるが、意も響もすでに至り尽したものと謂つていい」と。

とまれ、僕は「赤彦の歌十首」を読み茂吉氏の至り尽せる鑑賞、批評のみならず、アララギ一派の穆々たる友ほくほく情の美しさを満喫して秋にふさわしい沁々とした悦びを味い得たのである。

(昭和十四年十月)

日本文学電子図書館

漱石・乃木将軍・赤彦・茂吉

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館